

「三者間自由会話における学習者の参加形態についての一考察  
 一言語使用の機会を生かし他者とつながる日本語学習者の育成のために」  
 AN ANALYSIS ON THE PARTICIPATION STRUCTURE OF LEARNERS OF  
 JAPANESE IN TRIADIC FREE CONVERSATION: WHAT WE CAN DO FOR  
 LEARNERS UTILIZING OPPORTUNITIES TO USE THE LANGUAGE AND  
 CONNECT WITH OTHERS

川上きよ美, アイオワ大学  
 Kiyomi Kawakami, University of Iowa

## 1. はじめに

三者以上が参加する多人数会話では、二者会話とは違った参加形態が観察される。二者会話と異なり、話し手以外の参加者のうちのある特定の一人が次の話し手になることは保障されていない。そのため、会話の参加者が進行中の会話にどこで参入するか迷う場面は少なくない。学習者同士の三者会話データを観察すると、活発に発話し言語使用の機会を生かしている学習者がいる一方で、あまり会話に入らずにいる学習者が見られる。学習者にとって進行中の多人数会話への参加は、様々な要因から困難なものとなる可能性がある(榎本ほか、2006)。そして、母語話者の援助がある接触場面での多人数会話よりも、さらに高度な会話技術を要すると考えられる。本研究では、先行研究であまり扱われていなかった学習者同士の三者間自由会話を調査資料とし、会話に活発に参加できている参加者の事例とあまりできていない参加者の事例について会話データのマイクロアナリシスを行い、会話中に何が起きているかを明らかにする。

本研究で用いた調査資料は、中・上級の日本語学習者同士が自由会話をする「日本語サロン」での三者会話データである。三者会話に活発に参加している参加者は、情報提供者として話題を提供したり、進行中の話題に対して感想を述べたり質問したりしている。これに対し、三者会話にあまり参加できていない参加者の会話データを観察すると、聞き取り能力や共有知識の不足、あるいはどのように会話に入ったらよいかかわからない、という問題があることがわかった。

社会的場面において、多人数会話に参加する機会が多い。本研究では、教室外での他人数自由会話に自信を持って参加し、日本語が使用されるコミュニティーにつながっていける話者を育成できる可能性について、議論する。

## 2. 先行研究

高梨ほか(2007)によれば、三者会話では、話し手以外の2人の聞き手のうちどちらが次の話者になるかは保証されていない。例えば、参加枠組み(Goffman, 1981)の要素、つまり聞き手といってもその中には実際に話しかけられている聞き手、つまり承認されている聞き手と、実は話しかけられていない、「承認されていない」聞き手がいるといったことや、視線が誰に向けられているかといったことが関係する。また、現在の話者が「何者として話しているか」により、聞き手、つまり次の話者が暗に指定されることもある。例えば、多人数会話が進行中

に、その中にいる母親が注意する発言をした場合、次の話者は暗に参加者の中にいる彼女の子供に指定されるといった場合がある。

また、Sacksらの古典的論文(1974)が提唱した話者交代ルールに沿わない例として、三者会話では、現行話者により次話者の指定(呼びかけなど)があった時でも、別の話者がターンを取る可能性がある。初鹿野&岩田(2008)はその例として、選ばれていない参加者についての「からかい」や「ほめ」が出た場合、その第三の参加者が、指定された次話者をいわば差し置いてターンを取る場合がある、と述べている。

三者会話における話者交代のこのような複雑性に加え、学習者の場合、榎本ほか(2006)によれば、聞き取り能力や会話技術、および共有知識の不足により、三者会話に積極的に参加するのが難しい場合がある。これは、大場(2012)が観察しているような接触場面の三者会話において、母語話者が、しばしば非母語話者が会話に参入する援助をしているのとは異なる状況である。

さらに、会話における成員カテゴリーの重要性にも、留意する必要がある。西阪(1995)は、サックス(1972)の成員カテゴリー化装置の概念について論じ、会話の中でその話し手が社会的にどの役割を果たしながら話すか、つまり何者として話すか(参照：高梨ほか、2007)が、話し手にとっても聞き手にとっても重要な要素であるとしている。西阪(1995)はその例として、教師が授業中に質問に答えるよう学生を指名し、その学生が「今ノートを読んでいます。」と答えた時、その教師は次の学生を指名し、その学生もそれが教師の当然の行為だと取るかもしれない、という事例を挙げている。それは教師と学生という社会的役割が前提となってこそその会話および行為であり、同じ質問が会社の会議でなされた場合は、異なった会話の流れとなるだろう。三者会話においては、それぞれの参加者がどの社会的役割を果たしながら話すかにより、次の話者や「承認されている」聞き手が暗に指定されている場合があり、会話への参与形態にも影響すると考えられる。例えば、多人数会話の中である参加者が日本語学習の先輩としての発話をした場合、参加者の中の日本語学習の後輩が聞き手として暗に選ばれている、というような事例が想定される。

さて、本研究では学習者の発話行動を観察するために、会話のマイクロアナリシスを行っている。岩田(2015)は、学習者のやり取りを記述する方法として、会話のデータについてマイクロアナリシスをする事について論じている。会話の様相は、一人の参加者の行動で成り立っているのではなく、相手の発話で共同構築されるものである。一つの発話は前の発話と直接連関するものとして出され、また同様に後続の発話と直接連関するものとして出される。特に三者会話に参加している学習者を観察する場合、会話への「参加の仕方」に注目する必要がある、そのためには会話データにマイクロアナリシスを行うことが有効である、述べている。

### 3. データおよび方法

本研究の会話データ(4組、計2時間)は、米国中西部の大学の日本語会話テーブル「日本語上級サロン」で収録したものである。「日本語上級サロン」は、3年

生の日本語コース(受講開始時における教室での学習時間 300 時間程度)と 4 年生の日本語コース (同 390 時間程度) の履修者を対象としており、週一回 1 時間学内のセミナールームに集まり、できるだけ日本語のみで会話するという活動である。会話の相手は自由に決めさせており、学習者はその時に話したいトピックを自由に選んで会話をする。参加者は各回平均して 5、6 名で、3 年生と 4 年生の割合は半々ぐらいであり、英語母語話者の割合は 7 割程度である。

本研究のために日本語サロンの参加者に 3 人で会話をしてくれるよう依頼をし、データ(各回約 30 分)を収集した。その後その会話を文字化してマイクロアナリシスを行った。(マイクロアナリシスに用いた記号については、添付資料を参照のこと。)

#### 4. 三者間自由会話における学習者の参加形態

##### 4.1. 事例 1 <聞き手から話し手へと参与役割が変化した例>

この事例では、「承認されていない」聞き手が聞き手として承認され、さらに話し手として進行中の会話に積極的に参与していく様子を観察する。

下の抜粋 1 で、T、Z は日本語 4 年生を履修中でクラスメート同士であり、M は前年度に 4 年生を履修し、5 年生レベルの開講を待っている学生である。3 人の間に友人関係は特にないが、日本語サロンに定期的に参加している既知関係である。日本語コース内で、T は日本語力において弱い学生であり、一方の Z と M は会話力が優れている学生である。なお、T は英語話者で、Z と M は中国語話者である。この抜粋に至る前の会話では、Z と M は二人が知っている(しかし T は知らない)あるゲームの話をしており、それに続く以下の抜粋で、あるアニメの話始める。

抜粋 1 : 「たくさん韓国のドラマを見て」

- 1 M : レルカ ?
- 2 Z : んと : 、 (.)エウレカ。ユウレカ。
- 3 (0.5)
- 4 M : そのアニメ( )
- 5 Z : ちょ-(.)ちょっと待って。私はアニメ[の( )]
- 6 T : hhhhh
- 7 Z : ((T を見ながら))アニメ-(.)アニメの名前。
- 8 T : ((うなずく))
- 9 Z : ((T を見ながら))エウレカ。
- 10 T : エウレカ。
- 11 Z : ((M を見ながら))エオレカ、エオレカですか。
- 12 M : エウレカ。
- 13 Z : エウレカ。
- 14 T : どんな英語を書きますか。
- 15 Z : イーユーアールイーケーエー-エウレカ。
- 16 T : エウレカ。

- 17 Z: いい : : (.)アニメですけど : : 、 ちょっと長い。
- 18 T: ((Z と M の両方に向かってうなずく))
- 19 Z: ご-(.)五十 : : 、 (.)五十巻。
- 20 T: そうか : 。
- 21 M: ( )。映画版もある。
- 22 T : 私は今 : : たくさんあの韓国のドラマ : を見て : [:、 ←  
((M と Z の両方を交互に見ながら))
- 23 Z : [韓国のドラマ。
- 24 M : あ : : 韓国の。
- 25 T : 韓国の : ドラマを : 見るので-  
((M のほうに向きなおりながら))
- 26 M : は : : -  
(5 行省略)
- 32 T : それはちょっと悲しいと思いますけど : : 、 あの : : 、 物語が好き
- 33 ので-あの : : ああ、 : 、 いいえ : : 、 ( )があります
- 34 か[: :  
((両手を大きく動かし、 ドラマを見て興奮しているジェスチャーをする))
- 35 M : [分かる。(.)分かる。
- 36 T : という感じ : 。
- 37 M : すげえわかる。

抜粋 1 に至るまでの会話では、ある戦艦ゲームを知らない T に向かって Z と M はゲームの内容を交互に説明するが、その中で M が内容の一部を知らないことが明らかになり、Z は中国語を使ってゲームの内容について M と情報共有を試みる。その過程で、中国語を理解しない T は参加者として役割を持たない「承認されていない聞き手」(Goffman, 1981)となり、発話も全くなくなる。それに続く上記抜粋 1 では、Z と M がエウレカというアニメについて話し始め、Z が主な話し手となり M が時折それに加わって、つまり協働して「承認された聞き手」(Goffman, 1981) T に説明するという形で会話が進む。しかしそれに続いて Z は、アニメのタイトルが本当に「エウレカ」であったかどうか確証がなくなり、M に情報提示を求める(11 行目)。ここのやり取りは話題となっているアニメについて知識がある Z と M の二人の間で行われ始め、T は再び「承認されていない聞き手」となる可能性が出てくる。しかし T は、エウレカという英単語がアニメのタイトルとなっていることに注目し、14 行目で「(エウレカという言葉は)どんな英語(のスペル)を書きますか。」と質問する。これは、三人の中で自分だけが話題となっているアニメを知らないという状況の下で、背景知識がある Z と M からより詳しい情報を求めただけでなく、英語話者としてこの英語タイトルに関する質問がここでできたからこそ、承認されていない聞き手から承認されている聞き手へと変わることができたといえる。西阪(1995)が論じた、サックス(1972)の会話における成員カテゴリー-何者として話すか-の表出であるということが出来るであろう。

この後 T はさらに、承認された聞き手から能動的な「話し手」へと、この会話への参与形態を変える。Z と M は順次ターンを取って協働する形で、T にアニメ「エウレカ」の長さやバージョンの説明をしていくが、21 行目で M が「(エウレカの)映画版もある」と言う。この M の発話を受けて、T は 22 行目で、Z と M 双方に交互に視線を向けながら、最近自分は韓国ドラマをたくさん見ていると言う。21 行目までの会話はアニメと映画版があるエウレカについてだったが、ここで T が韓国のドラマを話題として発話したことには、いくつかの示唆があると言える。まず、会話能力が高く活発なやり取りを展開する Z と M との三者会話において、T は、自分が詳しい話題を自ら提供することによってここで初めて話し手になれたということである。また、ここまでの会話の流れでは、中国出身の Z と M が、友人関係がないにも関わらず特定のゲームについて共通の背景知識があり、T はその知識がなかったため、会話に能動的な参加がしにくくなっていた。そして、三者全員が日本語の学習者であり、Z と M が中国出身であることを考慮すると、同じ東アジアである韓国ドラマの話題をここで始めるのは唐突ではなく、また会話の参加者皆にとって話しやすい話題である可能性がある。実際に 37 行目で M は、強い共感を「すげえわかる」と表現している。

#### 4.2. 事例 2 <「承認されていない」聞き手の状態にとどまり、能動的な話し手に転換できなかった事例>

ここでは、積極的に会話に参加したいのに自分が思っているように自由会話に参加できない、という意識を抱いている学習者が参加している会話例を取り上げる。この学習者は、日本語コースにおいて口頭試験等決まったタスクを達成するための話す能力が高い一方、抜粋 2 で観察されるように、自由会話での発話がかなり少なく、しかも聞き手としても、会話の流れの中の多くの場面で「承認されない聞き手」となっているのが見て取れる。

B、Z、L は共に日本語コースに属する学生であり、B と Z は三年生のコースに、L は四年生のコースに所属している。Z と L はそれぞれ三年生・四年生のコースの中で下位グループに属しているのに対し、B は 4 技能のすべてで三年生の上位グループに属している。三人に友人関係はないが、B は日本語サロンの常連であり Z と L は時々参加するメンバーであるため、既知関係にある。

特筆すべきこととして、B は「苦手な自由会話を練習するために日本語サロンに来ている。」、「(自由会話では)いつも何を話していいかわからない。」等、常日頃から述べている。

抜粋 2：「多分、ホテルより安かった」

1 Z：行ったことがある？

(L を指さしながら)

2 L：行ったことがある。二回。それは：、(.)この：：夏休み：、

3 二週間ぐらい：、なごや：、とひろしま：に行きました。

4 Z：好きですか。あ：：h もちろん h

5 L：でも一人で行ったから：ちょっとさみしくなる：-

- 6 Z : ((うなずく))  
 7 L : しくなっちゃった。  
 8 Z : ((うなずく))  
 ((B、顔を上げてLを見る))  
 9 (.)  
 10 L : えっと : :、カプセルホテルに泊まって、  
 11 Z : ° ( )ホテル° (0.4)  
 ((考えている表情))  
 12 L : カプセルホテル。聞いたことがある？  
 ((Zを指さしながら))  
 13 Z : ((首を振る))  
 14 L : 写真がある。  
 15 B : 私もよく知らない。 ←  
 ((顔を上げてLを見ながら))  
 16 L : ん？  
 17 B : 見たこと-見たことはある h  
 18 Z : 私も。  
 ((挙手をしながら))  
 19 L : ((うなずく)) (0.5) とても : : 混んでいる : :。  
 ((携帯の写真を探す))  
 20 Z : 有名。  
 21 L : 有名かどうかわからない : :。カプセルホテルは : : とても : : 面白い。  
 ((携帯の写真を探している))  
 22 あっ。((Zに見つけた写真を見せる。))  
 23 Z : あ : :。  
 24 L : (( )) えっと : :、そこで : : 泊まった。  
 ((体を引いてBにも写真が見えるようにする。))  
 ((Zは身を乗り出して見ている))  
 25 B : 多分 : :、(ホテル)より安かった。 ←  
 26 L : とても安かった。  
 27 (.)  
 28 L : h 寝られなかった h 人がいっぱいいるから : :、  
 29 みんなは歩く : :、私は一番下な : : カプセル、  
 30 Z : ((うなずく))  
 31 L : ですから : : ちょっと : : crawl hh[した : :  
 ((両手を這うように動かす))  
 ((ZとB微笑むが、Bは宙を見ている))  
 32 L : と : : 全部 : : みなさん : : 足をとんとん : :、した : :。  
 ((指で人が歩くジェスチャーをする))

抜粋 2 に至る以前の会話の連鎖の中で、日本に留学したいという Z に、L は広島  
の原爆資料館に行くことを勧める。韓国出身の B が「自分の出身国にとって第  
二次大戦はよくない歴史なので」その話はあまりしたくないと言った後は、この  
抜粋 2 で会話の話題が L が経験した日本旅行に推移してからも、会話は L と Z の  
間でやり取りされ、B の発話はあまり見られない。

一方 Z は、L の日本旅行の話題で会話が進行中の時(1-9 行目)と同様、10 行目  
で L が日本のカプセルホテルについて話し始めると、カプセルホテルという耳慣  
れない単語について考えていることを示したり(11 行目)、身を乗り出して写真を見  
る(24 行目)等、聞き手として会話に参加している様子が見られる。このような  
Z に対して、L も、Z を特定して質問したり(12 行目)写真を見せたり(22 行目)して、  
聞き手としての Z と会話を協働しながら作り上げていっている。これには、4 年  
生の先輩であり日本に二回旅行したことがある L、3 年生のコースに属し今後初  
めて日本に滞在してみたい Z という、この会話にどのような立場で参加するかと  
いう枠組みが、進行中の会話の連鎖の中ではっきりしたというのも、重要な要素  
としてあげられるだろう。

これに対し、B の場合、L の日本旅行の話題で進行していた会話の連鎖の中  
では、L がさみしかったと述べた時に顔を上げた(8 行目)以外は視線を落としたま  
まで発話がなく、聞き手としての参加姿勢は明らかでない。会話中 B は 3 人の  
参加者の中で中央に座っていたが、抜粋 2 から分かるように、会話は主に L と Z  
の間で進行している。

カプセルホテルの話題に推移してからもこの形態で会話は進行しつつあったが、  
L が(カプセルホテルの)写真があると言ったところで、15 行目で B が自分も(カプ  
セルホテルについて)よく知らない、と、「承認されている聞き手」へと移行す  
る手続きを取る。すなわち、ここまでの会話の中での説明する L、聞き手の Z と  
いう枠組みに、もう一人の聞き手として参入する手続きである。これを受けて話  
し手の L は、携帯電話に入っていた写真を見つけた時、初め Z だけに見せるが、  
その後 Z と L の両方に見えるように体の姿勢を変える。これに続いて、B はカプ  
セルホテルの宿泊料に興味があることを L に示すが(25 行目)、このやり取りは特  
には展開を見せず、L がカプセルホテルの状況をユーモアを交えて説明した後、  
話題は日本語の授業の話へと移る。

## 5. 考察

### 5.1. 聞き手から話し手への転換ができていない事例

事例 1 では、参加者 T が、他の二人の参加者とゲームやアニメについての知識お  
よび中国語という背景知識を共有しないため、「承認されていない」聞き手とし  
て三者会話の「傍観者」(高梨ほか、2007)となっていたが、その後話し手へと転  
換する様子が観察された。T は日本語のコース内ではいわゆる弱い学生であり、  
また自分の日本語会話の能力が低い、周りが何を話しているかわからない、とい  
う意識を持つ学生でもあった。T が三者会話において話し手への転換をなしえて  
いる要素として、次のような点が挙げられる。

第一に、サックス(1972)および西阪(1995)が論じている成員カテゴリー、つまり会話の中で「何者として話すか」という点である。英語話者であるTは、他の二人の会話の参加者(中国語話者)があるアニメの題名を確認しあっている会話の連鎖の中で、その英語題名のつづりを尋ねる。さらに、そのアニメの映画版の話題が出かかったところで、本人が最近よく見ているという韓国ドラマの話題を開始し、参加者全員が日本語学習者であること、また他の二人の参加者が韓国ではないものの東アジア出身であることを会話に生かし、その上で自分がより知識がある者としてその話題で話し手になれるよう布石を打つこと、すなわち会話上の「手続き」を取っている。それにより、その時点までずっと聞き手だった自身の参与形態を話し手へと転換している。

第二にTは、複雑になる可能性がある三者会話の話者交代システムをむしろ利用して、自分が話者として会話に参入できる状況を作っている。上述のように、Tは、自分が知らないアニメの話題で他の二人の参加者が速い速度でやり取りを進めている時にそのアニメの題名の英語のつづりを尋ねたが、それに先立って、Tは、二人のそのようなやり取りを聞きながら笑いを挟んでいる。このTの笑いをきっかけに、他の二人の参加者はそれまで二人だけでやり取りしていたにもかかわらず、その後はTを見ながら話し、二人の話し手と一人の承認された聞き手という形に参加の枠組みが変わる。その枠組みの変化を逃さず、関連する話題(韓国ドラマ)を出して、自分が話し手として参加する枠組みを作っていると言える。

## 5.2. 「承認されていない」聞き手から参加形態がほとんど変わらなかった事例

事例2では、事例1と対象をなす例として、日本語の授業では話す能力を含め上位グループに属するBが、話し手として積極的な会話の参加者となることができなかった会話例について考察した。Bは、自由会話に苦手意識があり、話し手として会話に積極的に参加できるようになりたいという具体的な目標をもって日本語サロンに参加している学習者である。

まず、事例2の三者会話の進行中、他の参加者が話している間、Bが話し手と視線をほとんど合わせないのが観察された。その一方、Bの聞き手としての行動をさらに観察すると、視線をずっと下に落としていても、会話の流れや話し手の発話の内容を理解していることがうかがえる。例えば、カプセルホテルの話題で会話が行進している時に、宿泊費が安いかどうかを確認したり、日本で旅行中一人で寂しかったと話し手が述べた時には、顔を上げて話し手を注視したりしている。しかし、会話の進行中、ほとんどの瞬間に、Bは視線を落とし、話し手に反応もしていない。上述のように、二者会話の状況と異なり、三者会話では、一人の参加者が話し手となっている時、他の二人のうちどちらの参加者が次の話し手になるかは不確定である。三人のうち二人の参加者が、話し手と「承認されている」聞き手として協働しながら会話を作りあげていっている場合、他の参加者と視線を合わせない、そして話し手の発話に聞き手として反応する発話もほとんど出さない、もしくは発話してもそのターンだけで後が続かないという第三の参加

者が、参加形態を「承認されている」話し手に変えるのは、困難であると考えられる。

さらに、B以外の二人の参加者の成員カテゴリーは進行中の会話の連鎖の中ではっきりしていたが、Bの立場は、Bの発話があまりなかったこともあり、曖昧なままだった。このことが、Bが「承認されている」聞き手となったり、話し手として会話に参入するのをより難しくしていたと考えられる。すなわち、B以外の二人は、一人が日本に複数回旅行したことがある日本語コースの先輩、もう一人が日本に初めて行ってみたい日本語コースの後輩というように、この会話の流れの中で立場が明確であった。それに対し、Bは東アジア出身で、日本語コースでは後輩ではあっても、日本に旅行したことがあるのを他の参加者たちは知っていた。Bの発話があまりない状態で、Bが進行中の会話にどんな形でかかわっていくのか、B自身だけでなく他の二人の学習者も判断しにくかったのではないかと考えられる。

## 6. まとめ

日本語学習者が接触場面ではない自由会話に参加する場合、日本語を使う機会を得るということが重要な目的であると共に、日本語を話すコミュニティーに入っていきたいということも重要な動機であると思われる。そのためには、ただ聞いているという参加形態もありうる母国語での日常会話と異なり、話し手として会話の積極的な参与者となることが必要であり、学習者もそれを意識している。

学習者にとって、話者交代システムが複雑な三者、もしくはそれ以上の多人数会話に話し手として参入していくことは、容易ではない場合もある。まず話し手と視線を合わせたり、あいづちや笑いを挟むことで、その時話している話し手から聞き手として意識されることが可能になり、またその次の段階として話し手としての参入もしやすくなる。

また、自由会話で何を話したらいいのか分からない、という場合、話し手への質問を入れてそれをきっかけとして会話を展開したり(川上、2014)、話し手が日本を旅行中寂しかったというような感想を述べた時には、共感を表明したり(川上、2015)することで、進行中の会話の中で会話参加者としての自分の存在を確立することが可能であろう。そして、日本語を使いながら人とつながることができれば、言語使用の機会が増えるだけでなく、学習者にとってより喜びのある言語学習が可能となると考える。

## 7. 今後の課題

今後の課題としては、本研究で採用したプロセスに加え、会話データ収録後当該参加者と共にデータを見ながらインタビューを行い、その後再度会話を収録するという段階を含めることが考えられる。また、既知関係にある相手と自由会話をしている時に話すことがない場合どんな話題で話せるか、クラスで話し合いをすることが可能であろう。

## 8. 参考文献

- 榎本美香ほか 2006. 「多人数インタラクションの多様性とダイナミズムー多人数インタラクションでは何が多くなるのか？」 第 18 会研究大会ワークショップ. *社会言語科学*, 9(2), 154-158.
- Goffman 1981. *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 初鹿野阿れ&岩田夏穂 2008. 「選ばれていない参加者が発話するときーもう一人の参加者について言及することー」. 2008. *社会言語科学*, 10(2), 121-134.
- 岩田夏穂 2015. 学習者のやり取りを記述する方法：会話分析を日本語教育に生かす試み」. 館岡洋子著 *日本語教育のための質的研究入門：学習・教師・教室をいかに描くか*. pp. 321-341. 東京：ココ出版.
- 川上きよ美 2014. 「学習者間の自由会話を通しての会話技術への気づきと向上の試み：多様化する日本語話者コミュニティー構成員への対応を目指して」. *2014 CAJLE Conference Proceeding*. 46-55.
- 川上きよ美 2015. 「共感の表明ー会話を通じて社会的関係を構築できる学習者の育成のために教師ができること」. *2015 CAJLE Conference Proceeding*. 107-116.
- 西阪仰 1995. 「成員カテゴリー」. *言語*. 24(11), 104-109.
- 大場美和子 2012. *接触場面における三者会話の研究*. 東京：ひつじ書房
- 高梨克也ほか 2007. 「多人数会話における話者交代再考ー参与構造とノンバーバル情報を中心にー」. *社会言語科学*, 9(2), 106-111.
- Sacks, Harvey, et al. . 1974. "A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation". *Language*, 50(4), 696-735.

|       |                            |
|-------|----------------------------|
| 添付資料  | <会話データのマイクロアナリシスに使用した記号一覧> |
| (.)   | ポーズ、沈黙                     |
| [     | 発話の重なるの開始                  |
| ::    | 音声の引き伸ばし                   |
| (( )) | 注記                         |
| ( )   | 聞き取り困難                     |
| ><    | 発話のスピードが周囲の発話のスピードに比べて速い   |
| =     | 2つの発話もしくは語の密着              |
| -     | 言葉の途切れ、カット・オフ              |
| ◦ ◦   | 音声小さい                      |
| 太字    | 音声大きい                      |
| 下線つき  | 音声が低い                      |